

Interview 人事課長へのインタビュー



入省1～2年目の若手職員が就職活動をしていた頃を振り返り、当時気になっていたことを中心に人事課長にインタビューを行いました。パンフレット本誌に掲載しきれなかったインタビュー内容をここで御紹介します！

これまで様々な部署を経験されていますが、特に思い出に残っている部署はありますか？

一番印象深いのは、島根県の教育委員会へ出向した時です。出向先では学校現場の先生方や校長先生と直接議論したり、自分が予算要求して認められた事業で子供たちが活き活きと活動しているところを直接目で見ることで、自分が担当している仕事在学校現場でどう実行されていくのかがダイレクトにわかり、大変やりがいを感じました。

出向する前と後で、仕事のやり方や仕事に対する考え方に変化はありましたか？

大きく変わりました。それまでも現場をよりよくするために仕事をしてきたつもりでしたが、文部科学省にいたるとやはりどうしても現場と距離感がありました。県教育委員会では、県が設置する県立学校（高等学校と特別支援教育学校）を担当していたので、校長先生や教頭先生が頻りに課にいらっしゃって話を聞いたり、自分が学校に伺う機会も日常的にあったりして、個々の学校の様子や課題もよくわかりました。文部科

学省にいたると、なかなかそういう感覚は持ちにくい。県教育委員会ではそうしたことを強く意識できたので、文部科学省に戻ってからは、国の施策が教育現場のニーズをきちんと踏まえているのかということ以前にも増してよく考えるようになりました。また、ある地域で大きな事件が起こったり、ある自治体の先進的な取組が話題になったりすると、国として全国各地の実態を調査しようとする場合があります。もちろんそうした実態把握が必要な場合もありますが、調査の相手方である教育委員会や学校現場は、文部科学省の都合で大きな負担を強いられ、本来行うべき教育活動などに支障が生じることにもなりかねません。出向して立場が変わった時、これ

らの調査は精選し、真に必要なものに絞るべきだと痛感しました。このような感覚は、現在、文部科学省が取り組んでいる”学校における働き方改革”を進めていく上でも非常に重要だと思います。

加えて県教育委員会で働いていた時は、学校での教育活動などに直接触れることも多く、自分が肌で感じて学んだことにより、その後、学校現場のことを話すときの説得力が増したと感じています。今でも初等中等教育に関しては、県教育委員会へ出向していた時の経験がバックボーンとなっています。まさに「百聞は一見にしかず」です。



大臣官房人事課長
池田 貴城 Ikeda Takakuni 平成元年入省（行政）

- 平成 元年 4 月 文部省高等教育局私学部私学行政課
- 平成 2 年 7 月 文化庁文化財保護部記念物課
- 平成 3 年 7 月 文部省体育局競技スポーツ課
- 平成 4 年 8 月 同 体育局体育課企画係長
- 平成 6 年 9 月 同 大臣官房総務課法令審議室審議第三係長
- 平成 6 年 12 月 同 大臣官房総務課法令審議室審議第二係長
- 平成 7 年 10 月 同 大臣官房総務課法令審議室審議第一係長
- 平成 8 年 4 月 島根県教育委員会高校教育課長
- 平成 10 年 9 月 文部省生涯学習局学習情報課課長補佐
- 平成 11 年 10 月 同 大臣官房総務課課長補佐
- 平成 13 年 5 月 文部科学省高等教育局高等教育企画課課長補佐
- 平成 14 年 10 月 同 大臣官房総務課課長補佐
- 平成 15 年 9 月 同 大臣官房付（命）文部科学大臣秘書官事務取扱
- 平成 16 年 10 月 同 高等教育局国立大学法人支援課企画官
- 平成 18 年 5 月 同 大臣官房人事課人事企画官（併）人事課副長
- 平成 20 年 9 月 同 大臣官房付（長期出張：米国科学財団）
- 平成 21 年 12 月 同 大臣官房教育改革調整官
- 平成 22 年 7 月 同 研究振興局研究環境・産業連携課長
- 平成 23 年 4 月 同 科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長
- 平成 24 年 1 月 同 高等教育局大学振興課長
- 平成 25 年 7 月 同 初等中等教育局財務課長
- 平成 27 年 7 月 同 大臣官房付
（併）内閣官房内閣参事官（内閣官房副長官補付）
（命）内閣官房新国立競技場の整備計画再検討推進室参事官
- 平成 27 年 10 月 独立行政法人日本スポーツ振興センター理事
- 平成 29 年 2 月 文部科学省大臣官房参事官
- 平成 30 年 4 月 現職

先日、1 か月間研修で地方の教育委員会等に行く機会がありました。教育委員会には教員出身の方が多く、教育現場のプロだと思う瞬間がたくさんありました。一方で教育行政に携わる職員としてのプロフェッショナルとは何かと考えた時に、私個人としては現場のことだけにとらわれないことであるとか、様々なことを踏まえた大局的な視野というのが、一つの視点として必要ではないかと思いました。池田課長はそのような大局的な視点をどのようにして培われましたか。

大局的な視野が必要だという点は、その通りです。入省して先輩から様々なことを教えてもらいましたが、その一つに「自分が一つ上の立場だったらどうするかを考えながら仕事をせよ」ということがあります。自分が係員なら係長の立場で、係長なら課長補佐の立場で考えよ、ということ。忙しい中、いつもそこまで考えて仕事をしていただけではありませんが、これまで、自分が全く気づかなかった点を上司がちゃんと考慮に入れて仕事を進めていることに驚かされたことが何度もあり、自分もできるだけ見習うよ



うにしてきました。そういう意識を頭の片隅に入れておくということは大切だと思います。

また、私は入省時に高等教育局に配属されましたが、最初は、まず自分の課の業務を理解することに一所懸命で、その合間に高等教育局全体のことも学び、更に他の局の大きな案件も知るように努めるといった感じでした。ただ、その後、文化庁や大臣官房、県教育委員会などでの勤務を経験した後、高等教育局に戻ると、様々な経験を踏まえ、以前より広い視野で高等教育のことは見ることができるようになっていました。経験を重ねるうちに少しずつ役職も上がっていき、担当する分野も広がるので、必然的に視野を広げていかないとはいけません。大局的なものの見方は、そのような中で、先ほど言ったような意識も持ちながら徐々に身についたと思っています。

それからもう一つは、出向先など文部科学省以外での業務を経験することでも視野が広がると思います。省内でも、これまで配属されていた局とは違う局から、自分がこれまでいた局を客観的に見ることができるようになると、新しい気づきがあると思います。



出向されてみて、改めて感じた教育行政のプロとしての役割に考えがあればお聞かせください。

教育行政のプロフェッショナルという点に関しては、端的に言えば、教育の本質や内容をわかっている、なおかつ行政のことも理解している必要があります。教育委員会では、優秀な教師の方々が指導主事や管理主事として教育行政に携わっていらっしゃいますが、こうした方々は教育のプロではあっても行政の経験はあまりないので、相当努力されて職務に励んでおられます。我々はその逆で、行政経験はそれなりに積んでいますが、教育活動の実践という点では、意識して身につけていく必要があると思います。こうしたことは非常に難しいことですが、教育行政をしっかりと進める上で大切なことです。文部科学省の職員の中にも教員免許を持っている人はいますが、実際に学校現場で教師として働いたことがある人はごく限られています。その意味で、我々が教育委員会に出向したり学校現場に研修に出たりして経験を積むことは、教育面について深く知ることができるよい機会です。そうした職員には、本省に戻ってからもそ



の時の経験を活かして活躍してほしいと思います。

池田課長が思う文部科学省の魅力とはどのようなものですか？

文部科学省が担っているのは人を育てる政策、未来に向けた仕事です。その多くは短期間で成果が出にくい上、その成果を数値で表しにくいので難しい面もありますが、それだからこそやりがいがあり、夢のある仕事だと思います。他府省の方からも「教育が一番大事なので、文部科学省には頑張ってもらいたい」とエールを送られることもあります。各府省が担当している仕事はどれも大事だと思いますが、その中でも文部科学省は未来を見据えた仕事に携われるという点が大きな魅力だと思います。